

ライティング徒然草

エグゼクティブ・アドバイザー 林 健一

第 27 回 データと主張の間に潜むもの

いきなりで恐縮であるが、まずは以下の文例を読み比べていただきたい。皆さんにとって、執筆者の主張（または結論）が受け入れやすいのはどちらであろうか。

文例 1

自覚症状の改善割合は被験薬群のほうが対照薬群よりも高く、割合の群間差は統計学的に有意であった。したがって、被験薬の自覚症状改善作用は対照薬よりも優れると判断した。

文例 2

投与終了時の LDL-C/HDL-C 比が 2.0 未満に到達した患者の割合は被験薬群のほうが対照薬群よりも高く、割合の群間差は統計学的に有意であった。したがって、被験薬の冠動脈プラーク退縮作用は対照薬よりも優れると判断した。

略語: LDL-C=low-density lipoprotein cholesterol, HDL-C=high-density lipoprotein cholesterol

おそらく、多くの方は文例 1 の主張をすんなり受け入れた一方で、文例 2 の主張は受け入れづらかったのではなかろうか。それ以前の問題として、文例 2 については、なぜこのような主張になるのかがわからなかった方もいらっしゃるはずである。しかし、これら 2 つの文例はいずれも以下の構造をしており、構造自体に違いはない。

2 つの文例の構造

〇〇の割合は被験薬群のほうが対照薬群よりも高く、割合の群間差は統計学的に有意であった。したがって、被験薬の□□作用は対照薬よりも優れると判断した。

すなわち、第1文でデータを示した後、第2文(したがって…)で主張を示すという構造は同じなのである。にもかかわらず、主張の受け入れやすさに違いがあるのはなぜであろうか。今回はスティーヴン・トゥールミンが提唱したモデルに従って、データと主張との関係を考えてみたい。なお、本稿では「主張」を「言いたいこと」という意味で使用しており、「結論」と言い換えても差し支えない。決して「強く言い張る」という意味ではないので、ご留意いただきたい。

さて、何らかの根拠から主張を導出することを論証という。この論証を Data, Warrant, Claim という要素で説明しようとするのがトゥールミン・モデルである。詳細は「議論の技法(スティーヴン・トゥールミン著, 戸田山和久・福澤一吉訳, 東京図書)」をご参照いただきたいが、要点を知るだけでよいという方には「新版議論のレッスン(福澤一吉著, NHK 出版新書)」をお勧めする。この新書では「Data, Warrant, Claim」をそれぞれ「根拠, 論拠, 主張」と訳しているため、本稿でもこの訳語を用いることにする。

このモデルでは、「根拠から主張を導出する際には、論拠が根拠と主張を結合させる」と説明する。たとえば、「新版議論のレッスン」では、太郎が「昨日(のお昼)はラーメンを食べた」という根拠から「今日のお昼はカレーにしようよ」という主張を導き、次郎がその主張に同意するという会話を紹介している。この場合、会話には登場しないものの、「昨日食べたばかりのものを今日もまたお昼にくり返し食べるのはいやだ」という論拠が存在し、これが根拠と主張を結びつけているのである。

ここで次郎が太郎の主張に同意したのは、2人の間で論拠が共有されたからである。このように、親しい者同士の会話であれば、わざわざ明示しなくても論拠を共有できるし、相手の論拠がわからない場合でも、「なぜそんな主張(結論)になるのか」と問うことによって、論拠を共有することも可能である。このため、口頭でのやりとりであれば、論拠を明示することは必ずしも必要ではない。しかし、文書で主張を伝える場合にはそうはいかない。よほど執筆者と親しい読者でない限り、暗黙のうちに論拠を共有することはできないし、疑問点が生じても執筆者に問いあわせることは難しいからである。そうであれば、必要に応じて論拠を明示すべきである。

冒頭の文例に戻ってみよう。文例1では、「被験薬群の自覚症状の改善割合は対照薬群よりも高い」という根拠(データ)から「被験薬の自覚症状改善作用は対照薬よりも優れる」という主張を導く際に、それほど大きな飛躍が生じていない。さらに、臨床研究に精通した読者であれば、「改善割合の高い薬剤のほうが有効性(改善作用)に優れる」という前提は理解できるであろう。このようなケースでは、論拠を明示しなくてもよいかもしれない。

これに対して、文例2では「投与終了時の LDL-C/HDL-C 比が 2.0 未満に到達した患者

の割合は被験薬群のほうが対照薬群よりも高い」という根拠(データ)から「被験薬の冠動脈プラーク退縮作用は対照薬よりも優れる」という主張を導く際に、大きな飛躍が生じている。実は、ここには「脂質異常症治療薬のランダム化比較試験の併合解析から、LDL-C/HDL-C 比が 2.0 未満に到達すれば、冠動脈プラークが退縮することが示されており、この比は薬剤の冠動脈プラーク退縮作用を評価する指標として用いることができる」という論拠が存在するのだが、さすがにこれは明示が必要である。

約5年前のことになるが、本コラムの第8回では臨床概括評価の書き方に言及した(2021年4月19日掲載「同じ調査の結果を報道したのに、記事の内容が異なる!?’)。その際には、データを列挙した後にいきなり主張を記載するのではなく、データをどのように解釈したのかを記載することが重要とご説明した。今回はその続編として、トゥールミン・モデルを取り上げた。このモデルに従えば、データをどのように解釈したのかを記載することは、論拠を明示することにつながる。第8回のコラムとあわせてお読みいただければ幸いである。